大学生のジェンダー特性語認知の経年変化

―テキスト・マイニングによる連想反応の探索的分析から―

湯川隆子*　清水裕士**　廣岡秀一***

Exploratory Analyses by Text Mining for Transition of Japanese Students' Associations to Gender Traits across the Last Twenty Years

Takako Yukawa, Hiroshi Shimizu and Shuich Hirooka

要　旨

本研究の目的は、大学生におけるジェンダー特性語の認知がここ20年でどのように変わったかを検討することである。1970年代と1990年代に男女各1000人の大学生を対象に、50語のジェンダー特性語について同一の分類テストと連想テストを実施した。主な結果は以下のようであった。⑴男性あるいは女性の典型的ジェンダー特性語として分類された特性語の数は、1970年代より1990年代のほうが少なくなっていた。⑵ジェンダー特性語に対する連想反応語は、1970年代でのほうが1990年代よりも典型的なステレオタイプを表すと見られる内容が多かった。⑶近年の日本の大学生においては、ジェンダー特性語に対し、ジェンダー・ステレオタイプに沿って反応する傾向が減少してきている。

問題と目的

かつて1960～1970年代に青年や成人を対象に行われた欧米やわが国の調査研究では、ジェンダー（1970年代当時は性役割と称されていた）規範・通念におけるステレオタイプが強固に存在することが確認されていた（Block, 1973；Broverman, et al., 1972；Williams & Best, 1982；柏木, 1967, 1972；伊藤, 1978；湯川, 1979）。そこでは、ジェンダー規範を具現したジェンダー特性、即ち、男性的あるいは女性的とされる性格特性が人々の間で明瞭に識別されていた。その典型は、特性語の種類に多少の広がりは見られるものの、『活動性と知性における有能さ』あるいは『作動性・道具性』が男性的特性として、『美と従順』あるいは『共同性・表出性』が女性的特性として括ることができた。

しかし、その当時から既に進行しつつあった社会状況のさまざまな変動や推移は、徐々にではあるが人々の生活のありようや価値観の揺らぎ・変貌をも促した。このことは、男と女に関わる価値規範や通念、ジェンダー・イデオロギーにおいても例外ではなく、伝統的なステレオタイプに則った性別意識から性に囚われない平等主義的な意識へと変化しつつあることが指摘されてい

平成19年９月20日受理　*社会学部心理学科教授　**大阪大学大学院人間科学研究科・日本学術振興会　***三重大学教育学部

る（McBroom, 1987；Lewin, 1987；鈴木, 1997；湯川, 2002, 2003；後藤・廣岡, 2003など）。「男性は男性的特性を、女性は女性的特性をという時代は終わり、男女共に両方の特性を併せ持つことが望ましい」とする画期的な『両性具有論』が提唱されたのもこうした流れに先んじてのことであった（Bem, 1974）。

本研究は、このような状況下にあるジェンダー規範に対して、人々がどのような認知的変化を辿っているのか、その様相を検討することが主目的である。具体的には、明瞭なステレオタイプの存在が認められていた1970年代と、その変化が指摘されはじめてから約20年を経た1990年代の二つの年代とで再テストされた同一調査結果を比較することによって、⑴ここ20年の間にわが国の青年（大学生）のジェンダー特性語に対する認知が実際に変化しているのか否か、⑵変化しているとすれば、その内容はどのような特徴や特質をもっているのかを検討することである。

本研究では、上記の点を検討することに関わって、方法的な工夫と吟味も加える。そのための課題を二つ設定した。一つはジェンダー特性語についての分類課題である。いま一つはジェンダー特性語についての連想課題である。

【分類課題】

これは、ジェンダーに関連するとされている種々の性格特性語について、それらを「男性的であること、もしくは男性に特徴的な性格を表す特性語」と「女性的であること、もしくは女性に特徴的な性格を表す特性語」とに分類することを調査対象者に求める課題である。

従来、青年や成人のジェンダー（1970年代当時には性役割）意識や発達を検討する方法としては、MMPIのMf尺度やGoughのCPIのFe尺度に代表される性役割尺度やインベントリーなどが有名であった。そこで用いられていた標準的な質問形式がこのタイプである。男女各々に社会的に付与されているステレオタイプとしての性格特性がどのようなものかをみたり、青年や成人の性役割の保有度や態度などが主として検討されていた。ここでは、種々のジェンダー意識や性格に関する測度として、「男性的特性語」と「女性的特性語」を分類させたり、典型的な「男性的特性語」と「女性的特性語」を一次元尺度の両極に対置させて、その程度を自身や他者について評価させる評定尺度形式のものが主流であった。この方法は、調査対象者にジェンダーに対する認知を直接的に尋ねるという意味で極めてシンプルな方法であり、従来よりよく用いられてきた常套的な方法である。このような従来型の方法を利用し、1970年代に実施した分類課題を再度1990年代に実施することによって、表層的ではあるが、変化の概括的様相を量的に捉えることができると考えた。

【連想課題】

二つめは、ジェンダー特性語についての連想課題である。「男性的特性」「女性的特性」のステレオタイプを表すとされる典型的なジェンダー特性語各々について、その特性語（刺激語）に対する同義語（ことば）あるいはその語から連想される別の特性語に置き換えることを調査対象者に求めるものである。この連想テスト形式の方法は従来の性役割研究ではほとんど用いられることがなかった。ジェンダーに関する研究に限らず、通常、心理学などの分野で作成される尺度は、当該の時代や社会で生活する人々を想定し、かれらを対象者として質問項目が作成され、標準化されるのが常であった。このことは、当該の尺度やインベントリーが作成された時点での人々の

価値観や意識をそのまま反映したものになりやすく、当時の社会・文化的状況に強く拘束され、限定されていることを意味する。したがって、かなり長期間を隔てた２時点間の経年変化をみようとする場合には、質問項目の妥当性や適切性に疑義が生じる場合がある。本研究では、言語検査によく使われる「連想法」を応用することによって、 従来の尺度法の限界を超えることを試みる。1970年代に実施した連想課題を再度1990年代に実施し、所与のジェンダー特性語に対して連想される特性語（ことば）を比較検討することによって、時代によるジェンダー特性語の内包やイメージにおける変化の特徴をいわば質的に把握できると考えた。

以上の観点から、本研究では、分類課題と連想課題を併用することによって、大学生におけるジェンダー特性語に対するここ20年の認知的変化の様相を検討する。

【研究A】：分類課題

⑴　課題及び手続き

1960～1970年代時点において、主に男性的性格特性、女性的性格特性を表すとされていた50個の形容詞特性語からなる質問票を用いた(表１参照)。この50項目は既存の性役割尺度(MMPIのMf尺度(1969)、GoughのCPIのFe尺度(1964)、伊藤のM-H-F尺度(1978)、柏木の性役割尺度(1972))などから選定されたものである。

この50項目の形容詞特性語各々について、調査対象者に『男性に当てはまる特性語』、『女性に当てはまる特性語』、『男女ともに当てはまる特性語』、『男女ともに当てはまらない特性語』のどれかに分類するよう求めた。

表１　刺激語リスト

1	活発な	26	行儀のよい
2	自信のある	27	指導力のある
3	つよい	28	複雑な
4	かわいい	29	こまかい
5	冷たい	30	仕事に専心的な
6	謙遜な	31	くどい
7	頭のよい	32	感情的な
8	よわい	33	敏感な
9	線の太い	34	無頓着な
10	積極的な	35	明るい
11	理性的な	36	おしゃれな
12	従順な	37	質素な
13	依存的な	38	愛情豊かな
14	外交的な	39	家庭的な
15	政治に関心のある	40	でしゃばりな
16	美しい	41	静かな
17	きちんとした	42	つき合いのよい
18	忍耐強い	43	理想をもった
19	激しい	44	のんびりした
20	視野の広い	45	勝手な
21	気持ちのこまやかな	46	現実的な
22	大胆な	47	独創的な
23	経済力のある	48	神経の細かい
24	学歴のある	49	話上手の
25	意志強固な	50	粗略な

⑵　調査対象者

調査対象者は国公私立４年制大学の学生1976名で、その内訳は次のようである。1970年代については全体で1060名（男子569名、女子491名）、1990年代については全体で916名（男子456名、女子460名）であった。調査時期は、1970年代については1975年４月～1978年９月、1990年代については1991年４月～1996年１月であった。調査はどちらも集団で実施し、所要時間はいずれの場合も60分程度であった。

＊なお、本研究では、 調査票は実際には２種類のセットが作成されている。一つは、【研究A】の分類課題と後述する【研究B】の連想課題の［TypeⅠ課題］がセットになったものである。二つめは、【研究A】の分類課題と【研究B】の連想課題の［TypeⅡ課題］がセットになったものである。分類課題は【研究B】の［TypeⅠ課題］［TypeⅡ課題］いずれにおいても全く同じものであるので、ここでは［TypeⅠ課題］、［TypeⅡ課題］を込みにした対象者数を表記してある。

⑶　結果

目的に沿って、1970年代から1990年代への変化の様相を、１）ジェンダー特性語として調査対象者に分類された項目数、２）ジェンダー特性語として選ばれた項目の内容の一致度の２点から分析する。

1）ジェンダー特性語として分類された項目数

まず、 全50項目について、 調査対象者が男女のどちらに当てはまるとしたかの分類結果を次のように整理する。所与の項目について、「男性に当てはまる特性語」とした対象者数が、それ以外に分類した対象者数全部より有意に多い（CR比５％以下）項目を「典型男性性語（M）」として選びだす。同じ要領で「女性に当てはまる特性語」とした対象者数が、それ以外に分類した対象者数全部より有意に多い項目を「典型女性性語（F）」とする。さらに「男女両方に当てはまる特性語」とした対象者数が、それ以外に分類した対象者数全部より有意に多い項目を「典型男女両性性語（MF）」とする。なお、「男女ともに当てはまらない」として分類した対象者数が、それ以外に分類した対象者数全部より有意に多い項目はひとつもなかったので、以降の分析では『男女ともに当てはまらない特性語』については取り上げない。1970年、1990年各々の年代において、男女対象者に（M）、（F）、（MF）として選ばれている項目数とその特性語を表２に示す。表２から以下のことが指摘される。

①まず、典型男性性語（M）、典型女性性語（F）、典型男女両性性語（MF）のどれに当てはまるかの分類において、1970年代、1990年代を通じて、どの年代でも、 どの調査対象者集団でも、逆の判断のでたものはひとつもなかった。

②典型男性性語（M）、典型女性性語（F）、典型男女両性性語（MF）として分類された項目数を両年代間で比較すると、1970年代の男女対象者のほうが1990年代の男女対象者よりも、典型男性性語（M）、典型女性性語（F）いずれにおいても分類数が多い。しかし、典型男女両性性語（MF）については反対に1990年代の男女対象者のほうが多い。抽出された分類数については、1970年代男子対象者が他の３つの対象者集団より若干多い。

③さらに、同じ年代における男子対象者と女子対象者間での項目の一致度をみると、1970年代においては男女対象者間で一致する項目が、典型男性性語（M）では７項目、典型女性性語（F）では９項目と一致度はかなり高い。典型男女両性性語（MF）については１語のみである。一方、1990年代において男女対象者間で一致する項目は（M）、（F）、（MF）どれも３項目ずつであった。

各年代で男女対象者の間で一致してあげられている項目数によって1970年代から1990年代への変化をみると、典型男性性語（M）、典型女性性語（F）いずれにおいても７ないし９項目から３項目へと減少しているが、典型男女両性性語（MF）においては１項目から３項目へと逆に増えている。

2）ジェンダー特性語として選ばれている項目内容の一致度

次いで、同じく表２より、1970年代から1990年代への変化を、分類された典型特性語の項目内容から検討した結果は次のようであった。

1970年代に典型男性性語（M）あるいは典型女性性語（F）として分類されている特性語は、当時ジェンダー（性役割）特性語として諸研究の結果で提示されていたものとかなり相同、類似している（柏木, 1967, 1972； 湯川, 1995）。1990年代への変化をみると、1970年代にはみられず、1990年代で新たに出現した典型特性語はひとつもない。1970年代から1990年代への推移の中で、現在も維持されているとみられる典型特性語は、典型男性性語（M）では、『つよい』『経済力のある』『指導力のある』の３項目、典型女性性語（F）では、『かわいい』『美しい』『気持ちのこまやかな』の３項目であった。また、典型男女両性性語（MF）については、1970年代では『頭のよい』のみであったが、1990年代になると『頭のよい』『積極的な』『明るい』の３項目があげられるようになった。

これらの結果は、男性では「つよくて、仕事や政治に関心が高く、経済力もあり、意志が強く、自信と視野の広さをもった、指導力のある」、言ってみれば、 知性と精神力、 身体・運動能力ともに優れたオールマイティの人間が男性としての望ましさであったのが、1990年の現代では「つよくて、指導力、 経済力」があればよいとみなされるようになった。一方女性では、1970年代では顕著に目立っていた「従順さ」や「依存性」「よわさ」といった弱者のイメージが後退し、「美しさと配慮」が現代女性の典型的なジェンダー特性として認知されているといえる。さらに、男女両性に相応しいとされる特性が、1970年代では「頭のよい」の１語であったのが、1990年代では「頭がよくて、明るくて、積極的」という、いわば現代の誰からも好かれるタイプがあがってきている。

以上、分類課題における**1）**、 **2）**の分析から、ジェンダー特性語の認知における約20 年間の推移について次の２点が指摘できる。①かつては人間の性格特性がジェンダーによって区別され、認知されていた傾向が、近年になるに従って減少し、男女を区別せず、男女両方に共通の特性として認知される方向に変化しつつある。また、②、認知における調査対象者間の性差については、従前、即ち20年前の男子対象者に性別を意識する認知がやや強いことが推察されたが、 経年変化における性別認知の減少傾向は男子により窺われる。これらの点から、全般的な傾向として、時代の変化に伴って、男女それぞれの特性に対する社会や人々の拘束力、規定力が弱まってきたことを指摘することができる。しかし、典型項目数の総数は確かに減ってはいるものの、今なお、男女を区別するジェンダー特性語が現存しているのも事実である。このことは、むしろ、男女いずれの特性においても、少数の特性語に凝縮、収斂され、その分より明確かつ厳格になってきていると解釈されうる可能性も残っている。

表２　1970年代、1990代各々において選ばれた典型的ジェンダー特性語

	【1970年代】		【1990年代】	
	男子対象者（N＝569）	女子対象者（N＝491）	男子対象者（N＝456）	女子対象者（N＝460）
M	2　自信のある 3　つよい 9　線の太い 15　政治に関心のある 20　視野の広い 23　経済力のある 25　意志強固な 27　指導力のある 30　仕事に専心的な 42　つき合いのよい 47　独創的な （11語）	3　つよい 15　政治に関心のある 20　視野の広い 23　経済力のある 25　意志強固な 27　指導力のある 30　仕事に専心的な （７語）	3　つよい 23　経済力のある 27　指導力のある 34　無頓着な 50　粗略な （５語）	3　つよい 9　線の太い 23　経済力のある 27　指導力のある （４語）
F	4　かわいい 8　よわい 12　従順な 13　依存的な 16　美しい 21　気持のこまやかな 29　こまかい 32　感情的な 36　おしゃれな 39　家庭的な 40　でしゃばりの （11語）	4　かわいい 8　よわい 12　従順な 13　依存的な 16　美しい 21　気持のこまやかな 26　行儀のよい 29　こまかい 32　感情的な 40　でしゃばりな （10語）	4　かわいい 16　美しい 21　気持のこまやかな 39　家庭的な （４語）	4　かわいい 12　従順な 13　依存的な 16　美しい 21　気持のこまやかな 32　感情的な 40　でしゃばりな （７語）
MF	7　頭のよい 35　明るい （２語）	7　頭のよい 10　積極的な （２語）	7　頭のよい 10　積極的な 35　明るい （３語）	7　頭のよい 10　積極的な 14　外向的な 35　明るい 36　おしゃれな 45　勝手な （６語）

【研究B】：連想課題

⑴　**課題及び手続き：**次の【TypeⅠ課題】と【TypeⅡ課題】から構成されている。

【TypeⅠ課題】：【研究A】の分類課題で用いた50個の特性語（連想刺激語）各々について、『男性の場合』『女性の場合』で別々に「他の似た形容詞（ことば）、または連想する形容詞（ことば）」に最低１単語以上置き換えるよう求めた課題。

【TypeⅡ課題】：上述50個の特性語各々を、「他の似た形容詞（ことば）、またはその形容詞から連想する別の形容詞（ことば）（『一般的連想語』）」に、最低１単語以上置き換えるよう求めた課題。

なお、【研究A】の調査対象者の項で先述したように、実際の調査票は２種類作成されている。一つは、【研究Ａ】の分類課題と【研究B】の［TypeⅠ課題］がセットになったもの、二つめは、【研究Ａ】の分類課題と【研究B】の［TypeⅡ課題］がセットになったものである。

⑵　調査対象者

調査対象者は【研究A】と同一の国公私立４年制大学学生1976名であるが、［TypeⅠ課題］と［TypeⅡ課題］の調査対象者はそれぞれ独立しており、調査時期も別々である。即ち、1970年代における［TypeⅠ課題］は全体で562名（男子306名、女子256名）、［TypeⅡ課題］は全体で498名（男子263名、女子235名）であり、調査時期は、1975年４月～1978年９月であった。1990年代については、調査対象者は［TypeⅠ課題］では全体で483名（男子228名、女子255名）、［TypeⅡ課題］では、全体で433名（男子228名、女子205名）であり、調査時期は、1991年4月～1996年１月であった。調査はどちらも集団で実施し、所要時間はいずれの場合も60分程度であった。

⑶　分析の手順

１）連想反応語の整理・分析

連想反応語の整理、分析に際しては、「ワード・マイナー（Word Miner）」（日本電子計算株式会社）によるテキスト・マイニングを使用した。テキスト・マイニングとは、単語単位共頻関係を数量的に分析する手法であり、ワード・マイナーには、対応分析とクラスター分析がセットになっている。本研究のような連想反応におけるパターンを質的に検討する上でこの手法が有効と考え、テキスト・マイニングを用いて対応分析とクラスター分析を行うこととした。具体的な整理、分析は以下の手順で行った。なお、分析については、予定していた分析方法が有効であるかどうかを見るために、［TypeⅠ課題］と［TypeⅡ課題］の区別をせず、両課題を通した込みでの分析を試みた。分析データのための連想反応語の整理は、まず、⒜調査対象者毎に、50個の連想刺激語各々に対する反応語を全部逐語記録して、総一覧を作る。⒝全対象者を通じて出された全ての反応語に対し、名詞（漢字、平仮名、片仮名含む）、 動詞、 形容詞、 形容動詞等について同一意味と判断される語を同一単語として集約した上で、 反応語をカテゴライズする。⒞カテゴライズされた総反応語の頻度順一覧表を作る（連想刺激語が反応語として出されている場合も含める）。上記整理、分析作業は、まず全ての反応語の「単純書き出し」を行い、ある程度集約した上で、それもとにワード・マイナーによるテキスト・マイニングを使用してデータ化した。テキスト・マイニングの具体的な作業手順は清水(2005)、小川・斉藤(2006)らのものを参考にした。

２）対応分析

【研究Ａ】で分類された典型的なジェンダー特性語である「典型男性性語３語」「典型女性性語３語」「典型男女両性性語１語」に絞って、これらについての連想反応語を再整理し、分析する。ここでは、「ワード・マイナー」における分析上の処理単位となる単語を「構成要素」とよぶが、これを用いる。具体的には、「典型男性性語３語」、「典型女性性語３語」については構成要素の出現頻数が10以上のものを取りあげた。「典型男女両性性語」については典型語が１語しかなく、他のカテゴリーよりも構成要素の種類が少なかったので、５以上の語を取り上げることとした。

その結果、「典型男性性語３語」では上位114語、「典型女性性語３語」では上位95語、「典型男女両性性語１語」では上位80語までを分析対象とした。これに調査対象者の性別と調査年代を構成要素に加え、対応分析を施した。

⑷　結果

１）対応分析による成分スコア

対応分析で得られた成分スコアを２次元までプロットしたのが図１、２、３である。図１、２、３に見られるように、「典型男性性語３語」「典型女性性語３語」「典型男女両性性語１語」いずれにおいても、成分スコアは「性別」と「年代」を各々軸と解釈しうるような布置を示していた。

以下、具体的に「典型男性性語３語」「典型女性性語３語」「典型男女両性性語１語」についてみていく。

①図１の「典型男性性語」のプロットをみると、「70年代」のほうが「90年代」に比べて、連想反応語数が僅かだが多く現れている。「70年代」・「女」の次元には、『つよい』という本研究での典型男性性語が見られる。「70年代」・「男」の次元では、『男らしい』『自信のある』などの男性特性語が目立つのに対し、『家庭的な』『弱い』といった女性性語も認められる。「90年代」・「男」の次元では、『指導力のある』という典型男性性語が見られるとともに、『頭のよい』という「典型男女両性性語」も見られる。「90年代」・「女」の次元については特段の指摘はできない。

②図２の「典型女性性語」のプロットをみると、「70年代」のほうが「90年代」に比べて、連想反応語数が僅かだが多く現れている。「70年代」・「男」の次元で、『美しい』という典型女性性語が見られるほか、『よわい』『神経の細かい』といった旧来の女性性語がみられる。「70年代」・「女」の次元では『明るい』という典型男女両性性語が認められる。それとともに、『愛情豊かな』『あたたかい』、その反対の『冷たい』といった感情語が目立つ。「90年代」・「男」の次元では、『かわいい』という典型女性性語が出されているのが注目される。「90年代」・「女」の次元では、『美人な』に加えて『きれいな』『きちんとした』『気配りのある』『配慮のある』という女性特性に傾いた連想語が見られる。

③図３の「典型男女両性性語」のプロットをみると、「70年代」のほうが「90年代」に比べて、連想反応語数が僅かだが多く現れている。「70年代」・「女」の次元には、『指導力のある』という本研究での典型男性性語が見られる。「70年代」・「男」の次元では、『理性的な』『優秀な』『理屈っぽい』『頭脳明析な』などの知的な優秀さを表す特性語が目立つとともに、『冷たい』『冷静な』といった情緒性を表す特性語も認められる。「90年代」・「男」の次元では、『強い』という典型男性性語が目立つが、そのほかには、『スマートな』『かっこいい』といった特性語も見られる。「90年代」・「女」の次元については『頭のよい』の典型的な両性性語が認められるとともに、『機転の利く』『聡明な』などやや女性特性に傾いた語が見られる。

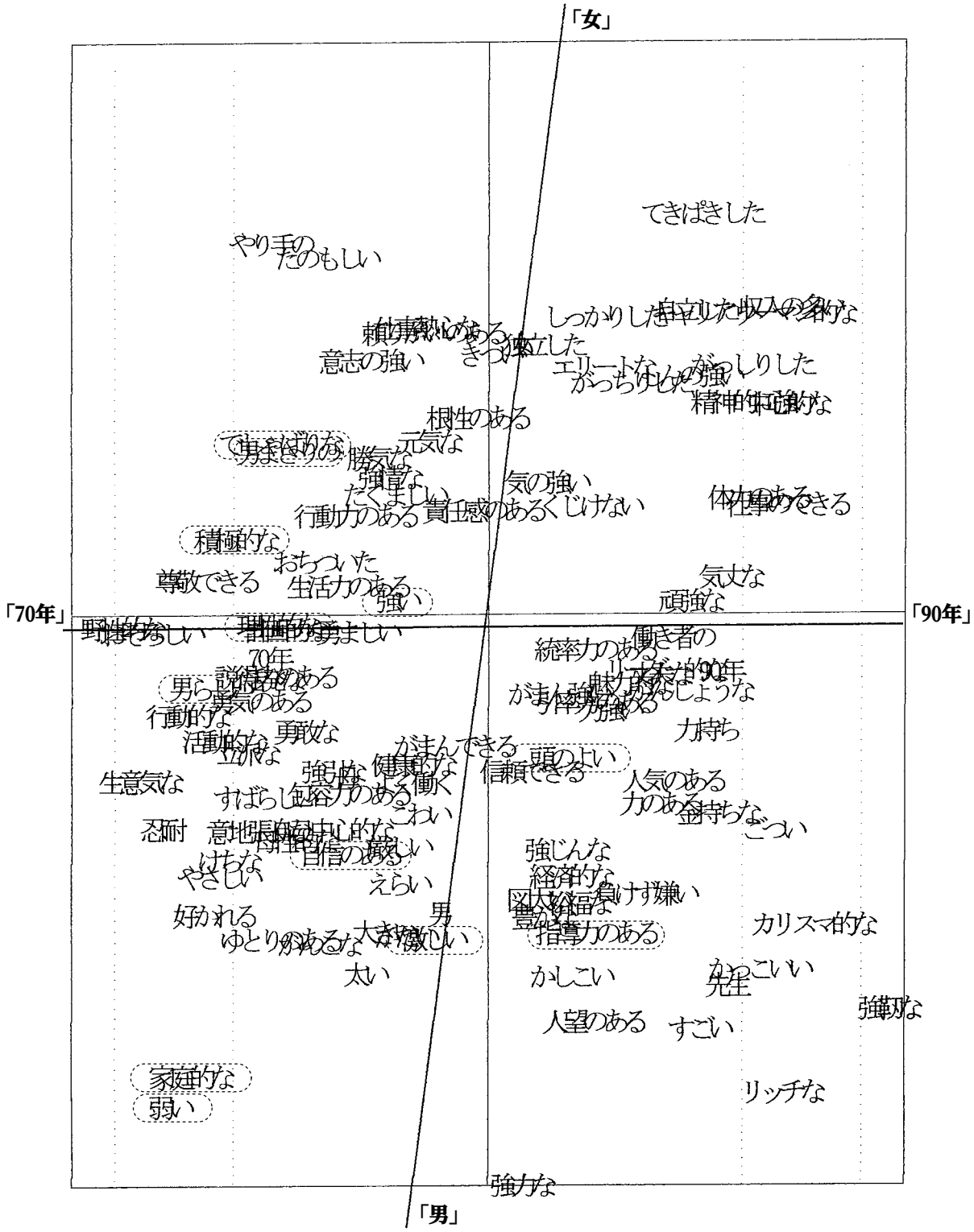

図１　典型男性性語：成分スコア・プロット（２次元）

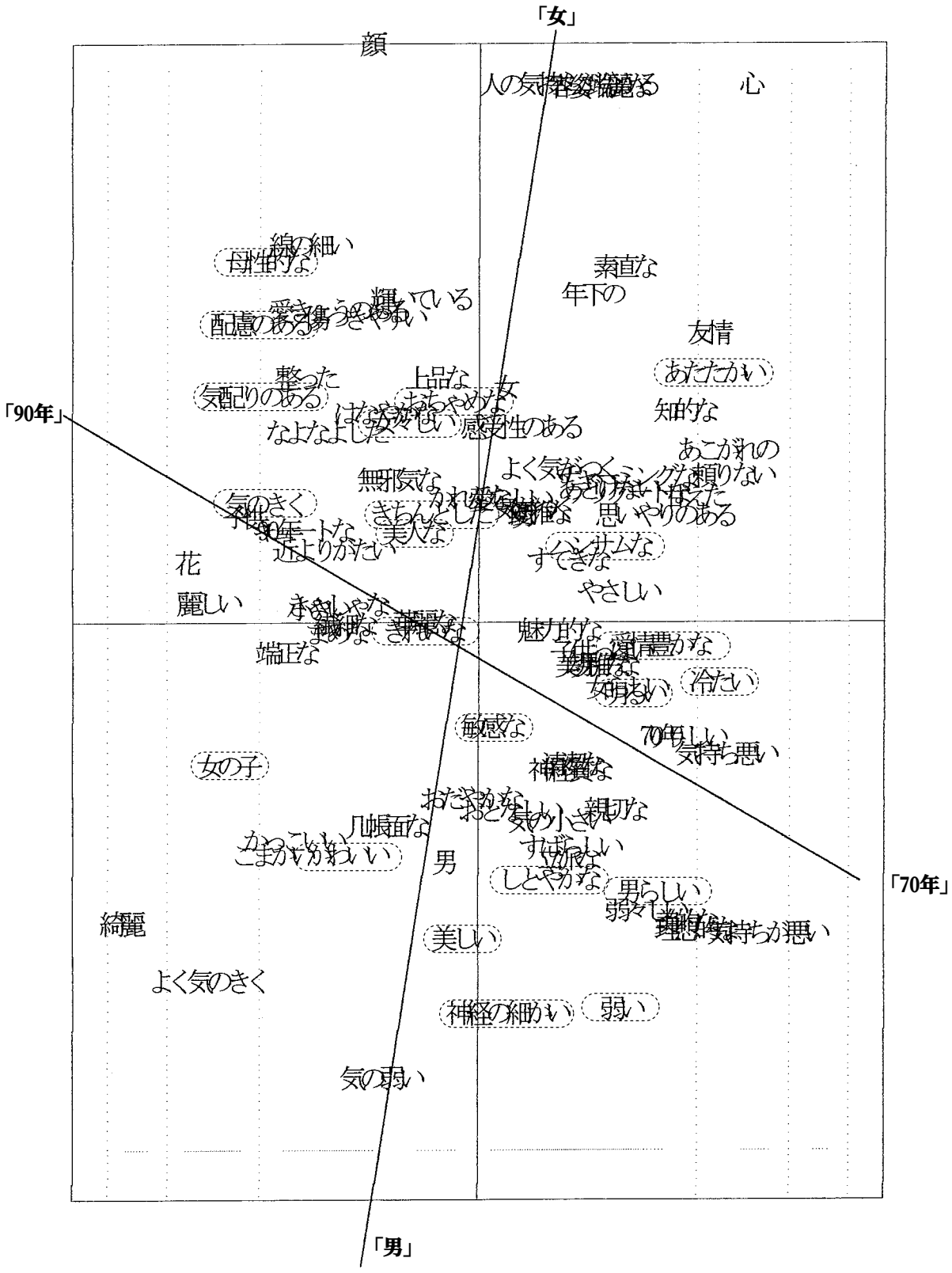

図２　典型女性性語：成分スコア・プロット（２次元）

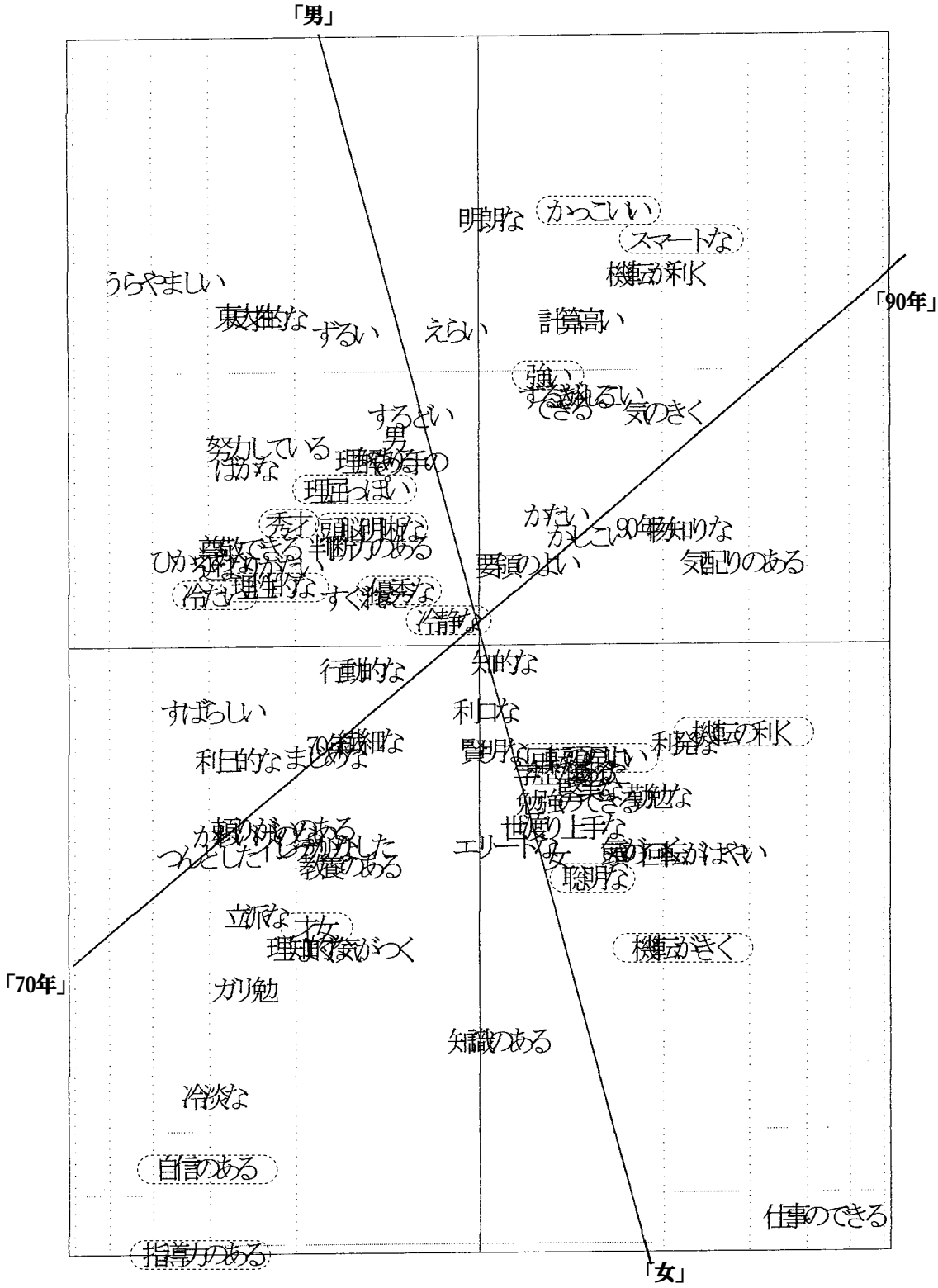

図３　典型男女両性性語：成分スコア・プロット（２次元）

以上、図１、２、３の「典型男性性語３語」「典型女性性語３語」「典型男女両性性語１語」についての対応分析による成分スコアから読み取れる結果は、次のようにまとめられる。即ち、「典型男性性語」「典型女性性語」ともに、「70年代」では「90年代」に比べて連想反応語数がやや多く現れており、かつ、 旧来のジェンダー・ステレオタイプを表す連想反応語が頻出していることである。

２）クラスター分析による結果

対応分析で得られた成分スコアのうち15次元データをもとにクラスター分析を行い、「典型男性性語」「典型女性性語」「典型男女両性性語」ともに５個のクラスターまでを抽出した（表３、４、５）。なお、今回、抽出されたクラスターについて、それぞれに明確な命名を付すことが容易ではなく、ワード・マイナーの出力どおりの「クラスター１」「クラスター２」と呼ぶ。

抽出されたクラスターの内容を通覧すると、「典型男性性語」「典型女性性語」「典型男女両性性語」を通して概ね一貫した傾向を指摘できる。即ち、いずれの特性語においても、「70年代」と「90年代」、「男」と「女」が別のクラスターに分類されていることである。それらの中でも特に顕著なのは、調査年代を表す「70年代」と「90年代」であった。以下に具体的に見てみる。

①表３に示した「典型男性性３語」についてみると、まず、「70年代」と「男」が含まれていると見られる【クラスター１】には44語が属している。反応語の内容をみると、本研究の分類課題で「典型男性性３語」の中に選ばれていた『つよい』がみられ、『強じんな』『強力な』といった関連反応語も見られる。また、『男らしい』『母』『母性的な』といった性別に直結した反応語も目立つ。それに対して、32個の連想語が属していて「90年代」が含まれる【クラスター５】になると、精神的、身体的強さを表す語や経済力を意味する語が目立つが、『キャリア・ウーマン』以外には、ジェンダーの典型語や性別に関係した反応語は見あたらなくなる。次いで、【クラスター２】についてみると、『指導力のある』という典型男性特性語と『自信のある』という男性特性語がみられるとともに、『家庭的な』という女性特性語の両方が含まれ、『頭のよい』という「典型男女両性性語」も含まれている。【クラスター３】はやや男性特性に傾いた反応語が窺われるが、特に指摘できる特徴はない。なお、【クラスター４】には、「女」が属していて、主として女性の精神的な強さをイメージさせる特性に傾いた反応語が多いと推察される。

②次いで、 表４の「典型女性性語３語」についてみると、クラスターは大きく二つに分けられる。一つは、「70年代」と「女」を含む【クラスター１】で、47語が属している。もう一つは、「90年代」と「男」を含んでいる【クラスター４】で、38語が含まれている。それぞれのクラスターの反応語の内容をみると、【クラスター１】では、女性の特性である『よわい』がみられ、『女らしい』、『男らしい』という性別に直結した反応語も見られる。さらに、『神経の細かい』『きちんとした』という従来女らしさを示すとされていた反応語が見られると同時に、『明るい』という典型男女両性性語も含まれている。それに対して、38個の連想語が属している【クラスター４】には「90年代」と「男」が含まれているが、女性の典型語である『かわいい』『美しい』の２語がともにここに含まれており、『女々しい』『母性的な』『敏感な』『配慮のある』といった従来女性的特性と見られていた性別に関連した反応語が中心になっている。男性特性をイメージさせる反応語はほとんどない。なお、【クラスター２】と【クラスター３】【クラスター５】について

は、それぞれ５語、４語、１語と含まれる反応語数が少なく、特に言及すべき特徴も見あたらない。

❸表５の「典型男女両性性語」のクラスター分析の結果も、クラスターは大きく二つに分けられる。一つは、「70年代」と「男」を含む【クラスター１】で、40語がここに属している。もう一つは、「90年代」と「女」を含む【クラスター５】で、35語が含まれている。それぞれのクラスターの反応語の内容をみると、【クラスター１】では、『才女』という性別に言及した反応語が認められるが、ジェンダーに特化していると思われる反応語はあまり見られない。また、35個の連想語が属している【クラスター５】には「90年代」と「女」が含まれている。男性の典型特性語である『つよい』がみられるが、『頭のよい』という本研究で典型とされた「男女両性性語」の内の１語、その他に、『学歴のある』『機転の利く』『エリートな』『スマートな』『回転の早い』といった知的特性が主となってまとまっている。なお、【クラスター２】、【クラスター３】および【クラスター４】については、それぞれ２語、１語、２語と含まれる反応語数が極めて少なく、言及すべき特徴を見いだすことはできない。

以上、クラスター分析から得られた結果をまとめてみると、「70年代」に属する連想反応語数は、「90年代」のそれとくらべてやや多かったこと、また、反応語の内容においても、性別に直結、関連した反応語や本研究で典型的なジェンダー特性語として選ばれていた反応語が多く出されていたことを指摘できる。このことは、従来よりジェンダーに沿った性格特性とされてきた特性語を「刺激語」として提示したとき、それに対してイメージされる連想反応そのものが、「70年代」のほうでより顕著であったことを意味している。言い換えると、「70年代」には性別に直結、関連した反応語が見られるのに対し、「90年代」になるとそのような特徴が消失している、つまり、年代を経るに従って性別に準拠した反応そのものが減少するということである。それだけ「70年代」にはジェンダー規範がより浸透していたことの証左でもあろう。

表３　典型男性性語（M）：クラスター分析の結果
「つよい」「経済力のある」「指導力のある」

クラスターサイズ	クラスター１ 44	クラスター２ 14	クラスター３ 7	クラスター４ 17	クラスター５ 32
1	70年	かしこい	たのもしい	おちついた	90年
2	えらい	かっこいい	強引な	きつい	がっしりした
3	おそろしい	ごつい	仕事熱心な	くじけない	がっちりした
4	かたい	すばらしい	自己中心的な	しっかりした	がまん強い
5	がまんできる	家庭的な	人気のある	たくましい	がんじょうな
6	がんこな	健康的な	尊敬できる	てきぱきした	しんの強い
7	けちな	指導力のある	勇気のある	やり手の	エリートな
8	こわい	自信のある		意志の強い	カリスマ的な
9	すごい	弱い		引率力のある	キャリアウーマン的な
10	でしゃばりな	先生		強情な	リーダー的な
11	やさしい	頭のよい		元気な	リッチな
12	ゆとりのある	働き者の		自立した	頑強な
13	よく働く	理性的な		女	気の強い
14	意地張りな	力持ち		責任感のある	気丈な
15	活動的な			中心的な	強靭な
16	活発な			独立した	金持ちな
17	強い			頼りがいのある	経済的な
18	強じんな				根性のある
19	強力な				仕事のできる
20	計画的な				収入の多い
21	激しい				勝気な
22	厳しい				丈夫な
23	好かれる				図太い
24	行動的な				生活力のある
25	行動力のある				精神的に強い
26	信頼できる				体力のある
27	人望のある				統率力のある
28	生意気な				負けず嫌い
29	積極的な				魅力的な
30	説得力のある				勇敢な
31	太い				力のある
32	大きい				力強い
33	男				
34	男まさりの				
35	男らしい				
36	忍耐				
37	母				
38	母性的な				
39	包容力のある				
40	豊かな				
41	野性的な				
42	勇ましい				
43	裕福な				
44	立派な				

表４　典型女性性語（F）：クラスター分析の結果
「かわいい」「美しい」「気持ちのこまやかな」

クラスターサイズ	クラスター１ 47	クラスター２ 5	クラスター３ 4	クラスター４ 38	クラスター５ 1
1	70年	顔	愛情豊かな	90年	綺麗
2	あこがれの	心	花	おとなしい	
3	あたたかい	人の気持ちが分かる	子供	かっこいい	
4	あどけない	友情	女の子	かれんな	
5	おだやかな	容姿端麗な		かわいい	
6	おちゃめな			きゃしゃな	
7	きちんとした			きれいな	
8	すてきな			こまかい	
9	はなやかな			しとやかな	
10	やさしい			すばらしい	
11	よく気がつく			なよなよした	
12	りりしい			まめな	
13	チャーミングな			よく気のきく	
14	デリケートな			キュートな	
15	ハンサムな			気がつく	
16	愛きょうのある			気のきく	
17	愛らしい			気の弱い	
18	華麗な			気の小さい	
19	感受性のある			気配りのある	
20	甘えた			近よりがたい	
21	気持ちが悪い			女々しい	
22	気持ち悪い			小さい	
23	輝いている			上品な	
24	子供っぽい			整った	
25	思いやりのある			線の細い	
26	弱々しい			繊細な	
27	弱い			端正な	
28	女			男	
29	女らしい			配慮のある	
30	傷つきやすい			美しい	
31	神経の細かい			美人な	
32	神経質な			敏感な	
33	親切な			母性的な	
34	清潔な			優雅な	
35	素直な			幼稚な	
36	男らしい			理想的な	
37	知的な			麗しい	
38	年下の			几帳面な	
39	美男子な				
40	美的な				
41	魅力的な				
42	無邪気な				
43	明るい				
44	幼い				
45	頼りない				
46	立派な				
47	冷たい				

表５　典型男女両性性語（MF）：クラスター分析の結果
「頭のよい」

クラスターサイズ	クラスター１ 40	クラスター２ 2	クラスター３ 1	クラスター４ 2	クラスター５ 35
1	70年	指導力のある	すぐれた	仕事のできる	90年
2	うらやましい	自信のある		冷淡な	えらい
3	かっこいい				かしこい
4	かわいげのない				かたい
5	しっかりした				きれる
6	すばらしい				ずるがしこい
7	するどい				できる
8	ずるい				エリートな
9	つんとした				スマートな
10	ばかな				回転の早い
11	ひかえめな				学歴のある
12	まじめな				機転がきく
13	やり手の				機転が利く
14	よく気がつく				機転の利く
15	インテリな				気がつく
16	ガリ勉				気のきく
17	教養のある				気配りのある
18	近よりがたい				強い
19	行動的な				勤勉な
20	才女				計算高い
21	秀才				堅実な
22	尊敬できる				賢明な
23	男				女
24	知的な				世渡り上手な
25	天才的な				繊細な
26	努力している				聡明な
27	東大生				知識のある
28	頭脳明晰な				頭のよい
29	判断力のある				頭の回転がはやい
30	明朗な				物知りな
31	優秀な				勉強のできる
32	頼りがいのある				優れた
33	利己的な				要領のよい
34	理解ある				利口な
35	理屈っぽい				利発な
36	理性的な				
37	理知的な				
38	立派な				
39	冷たい				
40	冷静な				

まとめと考察

ジェンダー（性役割）特性語の認知におけるここ20年の変化をみるという本研究の目的に沿って、⑴ ジェンダー特性語にたいする青年や成人の認知は変化しているか否か、⑵変化しているとしたらその内容はどのような特質をもっているか、の２点について、分類課題による主に量的な面からみた分析と、連想反応課題における反応語の内容に関する質的な分析から検討してきた。

その結果、分類課題からは、1970年代から約20年を経た現在、男女を区別する性格特性語はかなり減少してきていることが指摘された。また、連想反応語の内容についての対応分析による成分スコアから得られた結果では、年代と性別を軸とする布置が得られた。さらに（対応分析による）成分スコアに基づいたクラスター分析からは、年代と性別を含む数個のクラスターが抽出された。それらに示された結果は、まず、1970年代と1990年代の連想反応語群はそれぞれが別のクラスターに分類されること、さらに、男女の性別もそれぞれ別のクラスターに分類され、年代と性別が明瞭に区別されうるというものであった。具体的な内容としては、「70年代」に属する連想反応語数は、「90年代」のそれとくらべてやや多かったこと、また、「70年代」には性別に直結、関連した反応語が多く見られるのに対し、「90年代」になるとそのような特徴が消失していた。つまり、年代を経るに従って、連想反応語自体が減少するとともに、性別に準拠した反応そのものが減少するという傾向を指摘できた。

以上のように、分類課題と連想課題によって得られた結果は大筋で一致するものであった。このことは、種々のジェンダーに関連した性格特性語について、それらが依然としてジェンダー次元に特化されたものとして認識されているかどうかを、調査対象者に直接尋ねる方法によっても、あるいは、それらのジェンダー特性語に対する連想語や同義語を尋ねるという方法によっても、いずれにおいても同じような傾向を導びき出せるということを示している。このような結果は、多くの意識調査や尺度法につきもののさまざまな社会的バイアスを考慮してもなお、 時代によるジェンダー認識の変化が認められるということであろう。その意味では、分類課題のようなシンプルな方法でも可能だともいえる。

しかし、 本分類課題で得られた情報は、 厳しく見れば、 ジェンダー特性語自体が単に減少したという概括的な傾向を示しているに過ぎないともいえる。変化の有無だけではなく、変化の方向と内容についての情報は明らかに不足している。が、明瞭かつ十分とはいえないまでも、内容についてのある程度の情報を得ることができたのは、今回利用した連想法によるところが大きいのではないか。今回用いた連想法では、1970年代のほうが1990年代よりも反応語数が多いという知見だけでなく、 性別を直接に表現したり、 従来男女のどちらかにしか使用されないような反応語（たとえば「男らしい」、「女々しい」、「母」、「男勝り」、「おしとやかな」、「かよわい」、「ひよわい」、「キャリア・ウーマン」、「ハンサム」など ）が、1970年代ではより多く認められたのに対して、1990年代になるとそのような反応語が見られなくなることを、明白にではないが引き出し得た。本連想課題の結果は、今なお、従来の性別規範を反映していると解釈せざるを得ない典型的ジェンダー特性語に対してさえも、本調査対象者である青年がジェンダー規範に準拠した認識をしなくなってきていることを示唆しえたといえるのではないか。ジェンダー認知の変化の方

向を示すとともに、 変化の内容や内包をも推察できたという点で連想法の有効性はかなり高いと考えられる。

ただし、今回分析した連想データは、タイプⅠ課題とタイプⅡ課題を込みにしたものであり、かつ、タイプⅠ課題の『男性の場合』と『女性の場合』で書き分けることを求めたデータも、それらの反応語を別々にするのでなく込みにしたものであった。このようなデータ整理と分析しか行えなかったのが 本研究が探索的分析に止まっている所以である。本来ならば、タイプⅠ課題とタイプⅡ課題を分けること、さらにタイプⅠ課題のデータについても、『男性の場合』と『女性の場合』で書き分けられた反応語について、これに年代と性別を変数とした分析に付すべきであろう。喫緊の課題である。今回は、結果に不明瞭さを残すこととはなったものの、ワード・マイナーによる整理、分析が可能であるかを試すという点においては、 その有効性をかなり示すことができた。本研究の収穫のひとつであったといえる。

結論と今後の展望

分類課題と連想課題の結果を通して、1970年代から約20年を経た1990年代の現在、ジェンダー（性役割）特性語そのものがかなり減少していることが指摘された。かつては人間の性格特性がジェンダーによって明確に区別されて認知されていた傾向が、近年になると男女を区別しない方向に変化しつつあることが示されたといえよう。このような結果は、ジェンダーに関する人々の認識が男女平等へと変化していることを示唆する最近の諸研究を支持するものである。

だがそれと同時に一方で、いまなお男女を区別する特性語も幾つか存在していることも確認された。それらは、「男性特性語」としては「つよい」「経済力のある」「指導力のある」の３項目、「女性特性語」としては「かわいい」「美しい」「気持ちのこまやかな」の３項目であった。これらはいずれも旧来よりジェンダー（性役割）特性語の中心的なものとされてきたものである。即ち、３つの「男性特性語」は主に「身体的、 知的、 経済的有能さ」を意味するものである。また、「女性特性語」の３項目も、 爾来、「女性的特性」の中核とされてきた「美と配慮」を意味するものである。

では、これらの特性語は男女を区別するような意味内容をこのままずっと保持し続けていくのであろうか。答えはおそらく" NO "である。その理由は、これらの特性語においても、ジェンダー規範や通念を含意、反映してつくられてきたと推察される性別に直結、関連したことばが、1970年代には多く用いられていたのが、徐々に消失しつつあることに求められる。翻って考えてみれば、「男らしい」「女らしい」ということばは「男」と「女」を区別するカテゴリーラベルとしての意味しかもちえないものである。それ自体は実体のないことばのはずである。そのようなことばが、あたかも実体をもつかのようにこれまで長くかつ強固に人々の間で認知されてきたのである（湯川，1995）。しかし、1990年代現在、性格特性を表現する上で、「男らしい」「女らしい」といったことばを連想することが徐々にではあるが消失しつつあることを示した本研究の知見は、今後『ジェンダー（性役割）特性語』と称されることばそのものがその意味と機能を失うであろうことを予見させるものである。

文献

１）東清和・鈴木淳子　1991　性役割態度研究の展望　心理学研究, 62, 270-276.

２）Bem,S.L. 1974 The measurement of phychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162.

３）Block, J.H. 1973 Conceptions of sex role: Some cross-cultural and longitudinal perspectives. American Psychologist, 28, 512-526.

４）Broverman,I.K., Vogel,S.R.,Broverman,D.M.,Clarkson,F.E.,& Rozenkrantz,P.S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. Journal of Social Issures, 28, 59-78.

５）後藤淳子・廣岡秀一　2003　大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化　三重大学教育学部研究紀要(教育科学)，vol.54，145-158.

６）伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究, 26, 1-11.

７）柏木恵子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究, 15, 193-202.

８）柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知Ⅱ　教育心理学研究, 20, 48-58.

９）Lewin,M. & Tragos, L.M. 1987 Has the feminist movement influenced adolescent sex role attitudes? A reassesment after a quarter century. Sex Roles, 16, 125-135.

10）McBroom,W.H. 1987 Longitudinal change in sex role orientations: Differences between men and women. Sex Roles, 16, 439-452.

11）小川一美・斉藤和志　2006　テキストマイニングによる中学生の自由記述データの探索的分析 ― 個人特性および人口学的変数との関連から ― 愛知淑徳大学論集コミュニケーション学部編, 6, 83-93.

12）清水裕士・小杉考司　2005　テキストマイニングを用いた心理学分析の応用例 ―異性関係への印象分析―　藤井和美・小杉考司・李政元（編著）福祉・心理・看護のテキストマイニング入門, 中央法規, 115-132.

13）鈴木淳子　1997 「レクチャー社会心理学」 性役割 一比較文化の視点から一 垣内出版

14）Williams, J.E., & Best, D. L. 1982 Measuring sex stereotypes: A thirty-nation study. Beverly Hills, CA: Sage.

15）湯川隆子　1979　性差　日本児童研究所（編）児童心理学の進歩 1979版，18，金子書房, 237-265.

16）湯川隆子　1991　性役割特性語の再検討　三重大学教育学部研究紀要（教育科学），vol.42, 109-118.

17）湯川隆子　1995　性差の研究　柏木恵子・高橋恵子（編著）「発達心理学とフェミニズム」ミネルバ書房, 116-140.

18）湯川隆子　2002　大学生におけるジェンダー（性役割）特性語の認知 ― ここ20年の変化 ― 三重大学教育学部研究紀要（人文科学），vol.53, 73-86.

19）湯川隆子・廣岡秀一　2003　大学生におけるジェンダー特性語の認知⑵ ― 性分類反応 からみた1970年代と1990年代の比較 ― 三重大学教育学部研究紀要（人文科学），vol.54, 117-123.

20）湯川隆子・清水裕士・廣岡秀一　2006　大学生におけるジェンダー特性語の認知 ― 連想反応からみた1970 年代と1990年代の比較 ― 日本社会心理学会第47回大会発表論文集，308-309.

追記：本論文を2007年８月９日に急逝した共同研究者である故廣岡秀一教授（三重大学・教育学部）に捧げる。本研究の分析、論文執筆にあたり、 多大な貢献を賜わったことに深く感謝するとともにご冥福を祈る。

Summary

The focus of this study was to examine the transition of gender (sex-role) stereotypes for the last twenty years. Different sample of about 2000 college students (about the half was female) participated in 1970s and 1990s. Data were collected in 1970s and 1990s. The questionnaires consisted of two types of constrained word association test. These tests asked subjects in each group to produce personality traits adjectives associated with each of fifty adjectives that represent typical personality traits in Japanese culture in 1970s. The first type of test asked to make association from the view point of male gender role.The second from the view point of female gender role. Subjects in each group were also asked to clasify each of the fifty stimulus words into male stereotyped traits, female stereotyped ones, both male and female ones, or neither. Main results showed a slight but remarkable differences between 1970s and 1990s. (1) Number of stimulus words into male or female gender stereotypes was smaller in 1990s than 1970s. (2) Nineteen seventies' contents were more typically stereotyped than those of 1990s. (3) Contents of associated responses in the 1970s' data were more typically stereotyped than in those of 1990s. (4) Japanese college students in recent years less distinctively recognize typical personality traits as male or female stereotyped traits in Japan.